

# 源氏物語における古物語性の問題 (二)

——宇治十帖を中心として——

目加田 さ く を

## (1) 総 角

薫が大君の身边に迫りはしたものの、其の御髪をかきやりつゝ「かの物の音きゝし有明の月影より始めて折々の思ふ心の忍びがたくなりゆくさま」を聞えしらせたのみで暁を迎へたその早朝「中の君の臥し給へる奥の方に」来て「添ひふし給ふ」大君を迎へた中の君は「例ならず人のさゝめきし気色も怪しくと思しつゝ寝給へる」ところであつたので嬉しくて夜着を姉姫にひきかけてあげようとする。

所せき御移香の紛るべくもあらず薫りかゝる心地すれば宿直人がもて扱ひけむ思ひ合せられて誠なるべしといはしうてねぬる様にて物も宣はず

姉姫の御衣から馥郁とにほうて来る香にハツとした。これこそは薫の君のあの香である。御二人御添寝の事実はもう疑ふ余地もないであらう。過日此の山荘の番人が薫の君の御衣をいたゞいて着たのはいゝけれどその移香が何時までも抜けないので何とか彼と

か人々に言はれて困り果てた事がある。それが自然連想されて、では御二人の御結婚は事実なのであらうと思ふと、あれほど父宮の遺言を楯にとつて結婚を拒否していらしたのにおいたはしい事——（それには又他にも、都はなれた貧しい山荘のくらし、お世話するみより一人ない結婚、等色々の思が含まれてのいとはしであるが）——と年若な妹姫は言葉もよう口に出ず、そつとねたふりをしてゐる、と言ふなか／＼よく書けてゐる個所で——（後述する如く実はこの様なところが源氏物語の本領であるが）殊に傍線のあたりは女流作家ならではの感を与へるのであるが、それだけ、中の君に「誠なるべし」と断定させた此の一条は重要な印象を讀者に与へてゐるわけなのである。しかるに、その後、猶も熱心に言ひ寄る薫の求婚に対し老女達まで動される気色をみてとつた大君が「私は結婚を断念してゐるが、みめ美しく年若な妹姫の方は世間並の幸な結婚生活にはいつて貰いたいと願つてゐる」といふ旨を中の君に告げて薫との結婚を暗にすゝめた際、中の君

は「如何に思すにかと心うくて『一所をのみやはさて世に果て給へとは聞え給ひけむはか／＼しくもあらぬ身の後めたさは数そひたる様にこそ思されためりしか心細き御慰めにはかう朝夕に見奉るより如何なる方にか』となま怨めしく思ひ給へれば」といふ態度である。これは決して、皮肉な言辭ではないのである事、中の君の性格、位置が証するのであるが、その「誠なるべし」を前提にしては近代小説では決して導かれて来ない言動である。次の条——井の君と大君との対話——大君が「中の君を自分の身代りに薫の君と結婚させ度いからその旨薫の君に告げて欲しい」と言ふに對し井の君は「さのみこそは前々にも御氣色を見給ふればいよくきこえさすれどさはえ思ひ改むまじき兵部卿の宮の御恨ふかさまさるめれば……」と「大君は薫の君、中の君は匂宮と結婚されるのが実に願はしかるべき事である」と忠告をするので大君は突つ伏してしまふ——を聞く中の君は只、

あいなくいとほしき御氣色かなと見奉り給ひて例の様に諸共に大殿ごもりぬ

といふのみである個所、と同じく、作者は中の君に「誠なるべし」と断定させた事を不用意にも忘れてゐるらしく思はれるのである。作者や読者と同じく中の君も、大君が未だ薫の君と婚してはゐない事実を知つてゐるものゝ様である。さて又その夜薫が忍んだ時、大君は逃げてしまった。後に残つてゐる姫を中の君と知つた薫は話をしたのみで部屋を出たのであるがその後、井の君が「いと怪しく中の君はいづくにかおはしますらむ」と探してゐるのを聞いて中の君は、

いと恥かしく思ひかけぬ御心地にかなりけむ事にかと思ひふし給へり昨日のたまひし事を思し出でて姫君をいと辛しと思ひ聞え給ふ

と言ふのである。「つらし」は姉姫が自分と關係の嘗てあつた薫を妹姫におしつけようとするから「つらし」ではなく、姉姫が自分分は清らかな独身（未婚のまゝ）を通し、妹姫だけ結婚させようとするから「つらい」のである。大君と薫の君との關係を「誠なるべし」と一度断定し「いとほしう」と同情した中の君が前提となつてゐないで、未婚の姉妹といふ立場の中の君が前提となつてゐるのである。作者や読者と中の君の位置を混同して、未婚の姉が自分は独身で通さうとして熱心に求婚する薫を妹に譲らうと企てた一コマである、として恨むのである。「誠なるべし」を忘れてゐないならば、作家紫式部としてはかくも簡単に中の君の心理並に態度を片づける事は出来ないところである。一度關係ありと思はれた姉姫がその相手に妹姫を嫁けようとしてゐると妹姫が思ふ立場、しかし事實關係はなかつた姉姫の場合、その複雑な姉妹の心理の経緯は、もし式部が不用意に見落さなかつたならば、物語に一境地を拓くものであらうが、その操作はもとより古物語のよくするところではないし、かゝる見落し、不用意自体が、古物語の本領であるといふべきものである。

## (2) 浮舟

文奉り給はむとて御前に参り給へる御容貌句この頃いみじく盛りに清げなりかの君も同じ程にて今二つ三つ勝る差別にや少し

老成勝れる気色用意などぞ殊更にも作りたむ様に貴なる男の本にしつべくものし給ふ帝の御婚にてあかぬ事なしとぞ世人もことわりけり

右の条は前後の文意から明瞭である如く、匂宮よりも薫の君が二、三才年長の故か、薫の君は匂宮よりも一段と成人しきつた容儀体佩、心用ゐで、わざと貴公子のモデルに作りあげた様な人と賞めてゐる個所である。宇治十帖において、主人公薫の君はその重りかな性格「真実ふかい恋」をする型の人間であるところから、軽々しく色めかしい情熱型の匂宮よりは年長らしい印象を与えるし、その方が妥当の様でもあるが、それは即ち、作者が読者にその様な印象を与へる様、自分自身、薫を匂より二、三才年長と考へて宇治十帖を形成して行つてゐる事に帰因するのである。しかしながら、既に、薫の君は匂宮より一年年下となつてゐたのである。

薫は『柏木の巻』の巻頭近くで出生する。間もなく生母女三宮は出家し、実父柏木は死去する。そして

三月になれば……この君五十日の程になりたまひて

と五十日の祝がある。従つて逆算すれば、薫は柏木の死去した同年一月又は二月に誕生した事になる。『横笛の巻』の冒頭は故権大納言（柏木）の一周忌のいとなみの話で始るから、薫出生の翌年、即ち、薫は数へ年二才といふ事になる。同じ巻で同じ年、匂宮の事を「三の宮三つばかりにてなかにうつくしうおはするを……」と言ふから、薫は匂の一つ年下である。それは横笛の巻前半春夏の候、二才の薫は這ひ出して来て「僅に歩みなどし給ふ

程なり」で、筈をとつて涎をながし／＼しやぶるのであり、後半秋の候では、夕霧がさし入れた花の枯枝をみて走り出てくる程度であるが、匂は夕霧をつかまへて「大将こそ宮抱き奉りて彼方へゐておはせ」とか「人もみず膺顔はかくさむいで／＼」とか言つて催促したり、御兄二の宮が「膺も大将に抱かれむ」と言ふと「あが大将をや」と言つて夕霧をつかまへて離さないで源氏に「三の宮こそいとさがなくおはすれ常に兄に競ひ申し給ふ」とたしなめられる程のいたずら盛りである。匂と薫二人の対照はかなり重要なものゝ様に見うけられ「常に遊んでゐる幼などち」として描いてゐるのであるから、源氏物語前篇の後期においては、作者が薫よりも匂を一才年上とした事には相当の腹案があつての事と想像されてゐたのである。

それが宇治十帖においては、反対に、薫が二、三才匂よりも年長であるとされ、二、三才年長の故か云々と、その二、三才年長である事自体にも又、相当の意味をもたせてゐるのである。かゝる作者の不用意は、竹取物語における翁の年齢が、かくや姫に結婚をすゝめるに際しては「翁年七十にあまりぬ今日ともあすともしらず……翁のあらむ限りはかうてもいますがりなんかし」と言ひ、姫昇天を嘆いては「この事をなげくに髪も白く腰もかゞまり目もたゞれにけり翁今年は五十許なりけれども物思には片時になむ老になりけると見ゆ」と言つたり、その場その場を強調するのに好都合な年齢に勝手にあらためて、いさゝかも懸念しない古物語作者特有の不用意、いはゞ古代的稚雅とも称すべきものと全く同類である。

### (3) 手 習

一品宮の御物怪を退散させる為に下山を懇請された僧都が、京への中宿りに小野の庵室に立ち寄る由を耳にした浮舟は、自分を亡き娘の再生とばかりにいつくしむ僧都の妹尼が、折柄初瀬詣の留守であるのを幸に、命の恩人である僧都にかき口説いて戒を受けようとするが、僧都はなか／＼肯じなかつた。しかし物怪の口吻や浮舟の決心で「とまれかくまれ思したちて宜ふを三宝のいとかしこくほめ給ふことなり法師にて聞え返すべき事にあらず御忌む事はいと易く授け奉るべきを急なる事にてまかでたれば……七日果ててまかんでむにつかうまつらむ」と時期を遅らさうとしても、妹尼に妨げられるのを恐れて浮舟は強ひて出家を遂げさせて貰つた。その受戒の後、夜中僧都一行は京に発つた。その翌日、浮舟に思をよせてゐる中将が訪問し浮舟と歌の贈答があるが、妹尼の帰庵については記さない。その後も何日に帰つたかには一向注意もしないものゝ如くその記事がない。只何日かに帰庵した妹尼は浮舟の出家姿をみて「あたらしがりつゝ僧都を恨み誇りけり」とある。他方出家をさせた後京に向つた僧都是一品宮の御悩みを治癒し奉つた後、予後を慮つての御修法を続行し、帰庵を延して禁中に逗留してゐる中、明石中宮と物語の序に浮舟を助けた一件から

その女人この度まかり出で侍りつるたよりに小野に侍る尼どもあひとぶらひ侍らむとてまかり寄りたりしに泣く／＼出家の志深きよし懇に語らひ侍りしかば頭おろし侍りにきなにかしが妹

故衛門督の妻に侍りし尼なむ亡せにし女子の代りにと思ひ喜び侍りて随分にいたはりかしづき侍りけるを斯くなりたれば恨み侍るなり……

と語り出すのである。事実としては、僧都の語つた此の時刻までには既に妹尼が帰庵してゐて兄を恨んでゐたでもあらう。(或は未だ帰庵してゐなかつたかもしれない。)しかし、僧都は加持に専念してゐてそれを知らない。妹尼から恨の文も来てはゐないし又、妹尼とても出家の身であるから、既に浮舟が出家してしまつてゐるのに、浮舟を出家せさなくなかつたと言ふ恨の文を兄僧都に書く様な事はしないであらう。従つて「恨んでゐるのでございませう」といふべきで「恨んでゐるのでございます」とは言へないところである。これは作者の脳中の事件構成では、僧都が京へ出て中宮に浮舟受戒の話を言上する前に、妹尼が帰庵して兄を恨むといふ構成になつてゐたため、迂濶に「恨み侍るなり」と断定したものであらうと想はれる。(僧都が「妹尼が恨んでゐるのでござう」と言ふべきを作者は知りつゝ意識的に「恨んでゐるのでございます」——勿論妹尼が恨むであらう事は火を見るよりも明かであるから——とした、ととる事はどうも不自然であるとおもはれる。)

### (4) 東 屋

物語の本筋に位置する「浮舟にかゝはる母は」詳細に描かれてゐる。しかし、「常陸守との間に生れた次女にかゝはる母」は夫常陸守にその冷淡さを指摘非難されてゐるとはしてゐるが、それにして

も生母たる事を忘れてゐるが如く無関心であるあたりは、矢張り古代的不用意、素朴と言ふべきであらう。浮舟をみかへた少将と結婚した次女には何等の責任もない構成をとる以上は。

「かぢけたる女の童を得たるなり……」

と二条院で女房達が少将の悪口をいふのを聞いた母はかぢけたる女の童の生母でありながらそれにはいさゝかも反撥動揺を感じず、只思ふ事は浮舟にかゝはる面ばかりであつて、

「少将をめやすき程と思ひける心も口惜しくげに殊なる事なかんべかりけりと思ひていとゞしくあなづらはしく思ひなりぬ」

案外拙らぬ男であつてみれば、浮舟の婿にしないでよかつた。どうしてあんな男を浮舟の婿にと希んだらう私は。といふのであるが、その少将は他人になつたのではない。も一人のわが生んだ娘と結婚してゐるのである。「しまつた」と思ふか、「まあやむを得まい……だから」と思ふにしろ、その辺少し複雑な母親の心理である筈である。それを描くのは古物語としては少し荷が勝ちすぎるであらうし、源氏物語でも亦、迂濶に見落した片手落といふべきであらう。

##### (5) 夢 浮 橋

薫の君に小野の庵室行きを依托される小君が、はじめて姉浮舟の生存を知る条では

幼き心地にも兄弟はいと多かれどこの君のかたちをば似るものなしと思ひ沁みたりしに亡せ給ひにけりと聞きていと悲しと思ひ渡るにかく宣へはいと嬉しきにも涙の落つるを恥かしと思ひ

て紛らはしに「を」と荒らかに聞えたり

又他方、浮舟が小君の訪れを聞いた時、

この子は今はと世を思ひなりし夕暮にもいと恋しく思ひし人なりけり同じ所にて見し程はいとさがなく生憎に驕りて憎かりしかど母のいと愛しくして宇治にも時々ゐておはせしかば少しおよづけしまゝに互に思へりし童心を思ひ出づるにも夢の様なり先づ母の有様はと問はまほしく……なか／＼これをみるにいと悲しくてほろ／＼となかれぬ

といふ、姉弟の間に情愛の交流が描かれてゐるのであるが、几帳ごしに對面するのを不満に思ふ弟に尼が「御文御覽すべき人は此処にもおせさせ給ふめり……猶宣はせよ幼き御程なれど御導に頼み聞え給ふ様もあらむ」とすゝめるけれども、小君は機嫌を損じであく迄、使者一点張りの態度である。「おぼし隔てておぼ／＼しくもてなさせ給ふには何事をか聞え侍らむうとく思しなりにければ聞ゆべき事も侍らず只この御文を人づてならで奉れとて侍りつるいかで奉らむ」と言つて、結局几帳の傍によつて姉に薫の君の御文を渡したが、その際にも、『御返り疾く賜はりて参りなむ』とかくうと／＼しきを心うしと思ひていそぐ。姉が泣き伏して猶も答へないのを見ると、

をさなき心地はそこはかとなくあわてたる心地して『わざと奉れさせ給へるしに何事のかは聞えさせむとすらむたゞ一言を宣はせよかし——（薫へ一言でもいゝから返事をしてほしい折角使者となつて私が来たのに返事がなくては困るからの意）』といふが浮舟が動じないので

すゝろにゐる暮さむも怪しかるべければ帰りなむとす人しれずゆかしき御有様をも見ずなりぬるを覺束なく口惜しくて心ゆかずながら参りぬ

これは、母をはじめ父も一家中歎いてゐた姉の死といふ人生の大仕事——（しかもまだ浮舟の生存は母に知らされてゐない）——でありながら、突然他人の文使の如く、幼心地といつても文通の出来る年齢である。そこはかとなくあわてたるとは、たかく病氣見舞の域を出ないのである。浮舟も母の事を聞くでもなく、小君も文をさし入れ乍ら、姉の顔を几帳の綻びから一寸覗うともしない。姉に「生きていらしてよかつた」といふ喜びの言葉すらかけない。母や弟が無視され、只、薫の文に対する浮舟の反応のみに関心があつて他を省る余地がなかつた。空蟬と光る君との間の文通をつとめさせられた小君ほど、浮舟の小君は生きてゐないのは明らかに二者対面前の二者の心境に比べて不自然で片手落であらう。

因みに又、浮舟の兄弟姉妹中、中の君を除いては、最も重要な役割を演ずるこの小君が「東屋の巻」において、浮舟の兄弟姉妹が紹介される折にも落されてゐるし、宇治の山荘へ母が時々伴つて行つたと前掲「夢浮橋の巻」ではじめて言ふのみで「浮舟の巻」「蜻蛉の巻」で母が宇治へ同伴したといふ極く簡単な照応——例へば「紅梅の巻」尾に附加された「八の宮の姫君にも御志浅からでいと繁うまうで歩き給ふ頼もしげなき御心……」程度のものでないものである。又、前掲「夢浮橋の巻」中の「今はと世を思ひなりし夕暮にもいと恋しく思ひし人なり」の照応もな

い。即ち「浮舟の巻」において浮舟が失踪する直前の記述

親もいと恋しく例は殊に思ひ出でぬ兄弟の醜やかなるも恋しく宮の上を思ひ聞ゆるにもすべて今一度ゆかしき人多かり

が唯一のものであるが、それにしては「兄弟の醜やかなるも」は少し酷であらう。これらに伏線乃至照応の存しない事は、もとより作者の手ぬかりであるがそれは、次の事情に帰因するのではあるまいか。「夢浮橋の巻」まで来て薫の文使が入用となり、他人では浮舟の側で寄せつけないのでその弟を——次項に類型を指摘した如く——空蟬の小君「紅梅の巻」の若君を連想し、安易に、呼名もそのまゝ空蟬を踏襲して「小君」を創造してこゝにはめ込んだものではあるまいか。「東屋の巻」「浮舟の巻」をかく頃まで「夢浮橋の巻」で「小君」に文使をさせるとは考へ及んでゐなかつた事に基く片手落の様に思ふのである。

#### (6) 夢 浮 橋

「夢浮橋の巻」において登場した浮舟の弟小君はあまりにも類型的な存在である。

年 齢	役 割	女君に 好意を もつ。	男君と 添 寝	身 分	呼 び 名	
童	男君に頼まれて文使となる	姉一人を頼る身故当然。	「御かたはらにふせ給へり若くなつかしき御有様を嬉しくめてたしと思ひたれば……」	女君の弟(つれ子) 光原氏 男君(女君に求婚する人物) に使はれる	小 君	空 蟬 の 卷
同	同	この君も東のをはやん事なく睦しう思ひ申したり……童心地にいと重りかにあらまほしうおはする心ばへを甲斐ある様にて見奉らばや……	「花も恥しく思ひぬべく芳しくて氣近くふせ給へるを若き心地には類なく嬉しと懐しく思ひきこゆ	女君に異父の弟 (母再婚後の弟) 男君、他は上に同	若 君	紅 梅 の 卷
同	同	兄弟は多かれとこの君のかたちをはにるものなしと思ひしみたりしに……	「夢浮橋の卷」末のすぐ後に匹敵する場面が空蟬の上掲の場面である。従つて「夢浮橋の卷」が後にかきつがれる場合にはこの場面の存在も予想される可能性がある	男君、他は上に同 (母のつれ子) (母再婚後の弟)	小 君	夢 浮 橋 の 卷

此の小君的類型は、落窪物語、住吉物語等古物語中よくある役であつて、夢浮橋の巻の小君は、その安易なとり入れにすぎない。

## (7) 手 習

浮舟が僧都一行に見出されて救出される条をみると

森かと思ゆる木の下を疎ましげの辺やと見入れたるに白き物の  
広がりたるぞ見ゆる……頭の髪あらば太りぬべき心地するにこ  
の火点したる大徳憚りもなく奥なき様にて近くよりてその様を  
みれば髪は長く艶々として大きな木の根のいと荒々しきに寄  
り居ていみじう泣く……「これは人なり非常の怪しからぬ物に  
あらず寄りて問へ亡くなりたる人にはあらぬにこそあめれもし  
死にたりける人を捨てたりけるが蘇りたるか……」

衣を取りて引けば顔を引入れていよく泣く

衣を引脱がせむとすれば俯して声たつばかり泣く

部屋に移されて後尾君達に介抱されるところでは

流石に時々目開けなどしつゝ涙のつきせす流るゝを……

最初の「いみじう泣く」は後の例から考へて、声をたてゝなくの  
でも、又、只涙をほろ／＼と流すのをみていふでもない即ち、  
顔を露出してはゐないわけである。地の文の「いみじう泣く」に  
対して僧都の詞の「亡くなりたる人にはあらぬにこそあめれ」は  
をかしい。顔を露出せず、「亡くなりたる人にはあらぬなめり」と  
作中人物に思はせる「いみじう泣く」様態は、もう少し具象的な

表現を必要とする筈である。「いみじう泣く」、「いよく泣く」、  
「声たてつばかり泣く」と激しさの加速度を抽象的に説明するの  
みで、少し複雑な動作の描写がないあたり、大股で歩く古物語に  
は極めて普通の行き方である。

## む す び (1)

宇治十帖の中に上掲の様な、如何にも古物語的な構成上の不  
用意、矛盾、乃至は表現上の不十分さを探して行くならば、ま  
だ／＼それは求められるであらうと思ふ。そこで考へなければな  
らないと思ふ事は、作者紫式部が、水も洩らさぬ構成などを企図  
してはゐなかつたのではないかと言ふ事である。もし、作者に、  
源氏物語全篇を通じてその構成に万全を期する意志さへあれば、  
それはさして難事ではない。各巻登場の人物の年表系譜を作るま  
でもなく、簡単な心覚えさへあればいゝのであつて極く簡単な事  
務でさへある。

物語のプロットにおける連珠様式は、私見に従へば、原初的説  
話精神の時代——記紀風土記の時代——以後の本質的な様式であ  
る。大国主命譚、日本武尊譚等々、何れも英雄たる主人公を緒と  
して貫かれた、一話一話まとまつた話の、時間的な前後の関係以  
外には何らの関係交渉なしに、たとへ同時に生起消長した事件で  
あつても、珠数つなぎに貫かれた連珠様式のプロットをもつもの  
である。竹取物語においても、伊勢物語、平仲物語、宇津保物語  
等々においても、主人公たるかぐや姫、男——在中、男——平仲、俊  
蔭と娘と孫仲忠、を緒としてゐて、例へば竹取において、かぐや



姫をめぐる五人の貴公子等が活動時、所を同うしながら、全然交渉衝突はなく、個々に独立していはゞ「並の巻」を形成してゐるのである。源氏物語の五十四帖も、本来「光源氏——夕霧（明石中宮）薫、匂と、その父子孫三代の物語」であつて、宛も宇津保物語の場合の如く、（宇津保は俊隆——女——仲忠と父子孫三代に伸びる緒——）一本の緒につらねられた相互無縁の五十四個の珠数（巻）であるべきものが、帚木、空蟬、須磨、明石又は柏木、横笛、御法、幻等々の如く、「つゞき」の巻を生じ、又、賢木の終末が飛んで須磨の原因となり、明石の伏線がすでに若紫（北山の僧房を立ち出でゝそぞろ歩き中に）に設けられてある如きは、源氏物語の進歩といふべきである。しかし乍ら、古物語においてそのプロットの連珠様式は本質的なものである如く、源氏物語にとつても生得的なものであつて、一面、全篇を通観する立場——（当時の読者たる更級日記の著者が、つゞきを讀みたがつたといふ事實は当時の物語の支持者達——作家と読者——の意同、ひいては物語作者紫式部の態度）——を示すと同時に、他面、各巻独自で、たとへば夕顔の巻——夕顔のものがたり——空蟬の巻——空蟬のものがたり——末摘花の巻——末摘花のものがたり——僅の巻——僅齋院のものがたり——といふ風に、光源氏或はその子孫と關係をもつ人々の話が——一帖乃至二帖でまとめられてゐるものである事、夕顔の巻一帖が、いひもてゆけば五十四帖が一帖或は二帖でバラ／＼に世にもてはやされてゐた——更級日記の例など——事實とも符合するのであるが、かゝる各巻の独自性、それは短篇性と呼ぶべきであるかもしれない立場との、二つの立場をもつものである。その当時、短篇流行の風潮と、印刷術が未発達な時代であるから創作の

面からも亦、書写による流布の面からも、各巻の短篇性は助長されて行つたものと想はれる。それは、評論の面から、例へば枕草紙『物語は』の段において「物語は任吉空穂殿移り国譲りは憎し埋れ木月待つ女……こまの物語は古かはほり搜してもていきしがをかしきなり物類みの中將宰相に子生ませてかたみの衣など乞ひたるぞ憎き交野少將」（山岸氏校註枕草子本による）と言ふ風に空穂中の各巻（殿移り国譲り）が他の短篇並に論評されてゐる、又物語の評論で有名な無名草子でも源氏物語の批評に際しては、全篇通じての論とふし／＼の論をしてをり、ふし／＼の論は他の短篇物語のそれに匹敵する、といふ事實からも証せられると思ふ。源氏物語五十四帖中、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、葵、花散里、明石、薄雲、僅、玉鬘、螢、真木柱、柏木、夕霧、匂宮、浮舟の十六帖が——（それが何人による命名であつたにしろ）——その巻の主要な人物名である。それは巻の名となる事を認めさせる様な、その人名によつて一帖をまとめる事が適當と思はれる様な構造を源氏物語がもつてゐたからである。それはいひかへれば現代口語では、当該人名に「ものがたり」を付して、例へば「夕顔のものがたり」と言へば明瞭になつて来る如く宛然短篇物語である。この様に見て来ると、例へば「桐壺の巻」と「帚木の巻」のつながりが緊密でないといふ事は、「浮舟の巻」と「蜻蛉の巻」の如きは直接のつながりである部類に属し「紅梅の巻」と「竹沙の巻」の如きは直接の連繋がない部類に属する、しかしそれが最も古物語的構成の古形をのこすものであるとみるべきではあるまいか。『つじつまのあふ構成の源氏物語』、いはゞ近代小説的源氏を想定する立場に対して、強

ひて言へば『つじつまの合はない構成の源氏物語』―前述僅か宇治十帖に關してすら幾多の構成上矛盾の、不用意をもつ源氏であるからして――『古物語源氏』を想定するのが私の立場である。

## むすび (2)

構成的に『つじつまのあふ事を左程強く期待しない源氏物語』では何を期待してゐるのであらうか。無名草子に

紫式部が源氏物語を作り清少納言が枕草紙を書き集めたるよりさきに申しつる物語とも多くは女のしわざに侍らすや

さきに申しつる物語とは「源氏」「狭衣」「夜半の寢覺」「浜松中納言」「玉藻」「とりかへばや」「かくれみの」「今とりかへばや」「心高き」「春宮の宣旨」「あさくら」「川霧」「岩うつ浪」「海人の刈藻」「末葉の露」「露のやとり」「みかはにさける」「宇治の河浪」「こまむかへ」「おたへの沼」「初雪」「有明の別れ」「夢語」「浪路の姫君」「浅茅原の侍」を指し、又事実、天喜三年五月六条齋院様子の物語合では「霞隔つる」佐賀以下同じ（女別当）。「玉藻にあそぶ」（宣旨）。「菖蒲かたひく」（大和）。「よそふる恋の一卷」（宮少将）。「波いつかたにと歎く」（中務）。「あやめもしらぬ」（左門）。「映す水泡」（少将君）。「淀の沢水」（甲斐）。「あらばあふよのとなげく」（出羽弁）。「菖蒲羨やむ」（讃岐）。「岩垣沼」（宮小弁）。「浦風に紛ふ琴の声」（武藏）。「浪こす磯」（出雲）。「蓬の垣根」（少納言）。「逢坂こえぬ」（小式部）。「なこそ心となげく」（式部）。「をかの山訪ぬる」（小左門）。「言はぬに人の」（小馬）。といふ如く、物語は、

換言すれば日本の十、十一、十二世紀の小説は、「女のしわざ」になるものであり、「女の御心をやるもの」（三宝絵詞）―後の位も何にかはせん―と更級日記の著者が熱中した如く―であつた。即ち、作家と讀者とが女性であつたためにその題名も前掲のものゝ如く、又その他の例を拾へば「あし火たくや」「袖ぬらす」「大津皇子」「玉の渚」「月待つ女」「うもれ木」「道心すゝむる」「花さくら」「人め」「いまめきの中将」「かはねたづぬる宮」「せり河」等の如く、浪漫的な感傷的な名称が多いのであり、主人公と想はれる青年貴公子或は姫君の名―人物名―が多い事が注目されるのである。かゝる物語の生産母胎たる作家と讀者との一団は多く後宮のサロンに集ふ貴婦人又はそれに準ぜられる人々（女房達）であつて後宮のサロンはしばしば歌会、註2絵合、香合等を催して歌才を競つたから、物語の生産母胎たる一団は当時一流の女流歌人達の諸グループであつた。前掲かゝる女流歌人によつて創作された感傷的題名をもつ物語群はその殆どが短篇なのである。そして、枕草子が「こま野の物語は何ばかりをかしき事もなく詞も古めき……日に昔を思ひ出でて虫ばみたるかはなりとり出で……とみし駒にと言ひて尋ねたるがあらはれるなり」（校注枕草子）と評し、無名草子が「権中納言は琵琶しのびやかに調べつゝ從冥入於冥永不聞仏名と口ずさみ給へる程こそいみじけれ……」「さて春宮の御位の末に女まゐらせてその便にたゞ夢ばかり立ながら行き違ひて互にせきかねて立ち別れさせ給へる程こそいみじくあらはれに悲しけれ」「そのたまといふ童にあひたる程こそいみじくあらはれなれ……さて出家したまひて後大宮雪ののふるをみてわが木

の下はうづもれぬらんと眺め給ひし折しも大将のかつふる雪をうち払ひてまゐりたまへる程」と言ふ風に、『……程』といふ表現をとる事自体がよきその証左であるが、如何にも相聞歌的抒情的場面乃至は女の態度をうつすところに作者の狙があつた様におもはれる。歌の世界に甚だ近く、大君の煩悶する場景に、浮舟のなやむ場面、薫、匂のその折節に浮ぶ心のかげりを映す事に、即ち、短時間の場面描写——（心の描写も含めて）——にあるのである。構成はいはゞ古物語そのまゝの行き方、なるがまゝの方法に安易に従つたまでである。サロンに集ひ殊に「物語合」などを生んだ女流歌人の場合、抒情詩即和歌であつた。かゝる和歌の世界と殊ど重なる源氏物語の抒情的雰囲気である。抒情性は由来、冷静で客観的、論理的なる構築性と両立しがたいものであるから、源氏物語がプロットの方面からみれば「しどけなき」小説とならざるを得なかつたのは、やむを得なかつたのであり、且又、その様にみる事が源氏物語に必要なみ方ではあるまいかと思ふのである。

— 本学助教授 —

註1  
註2

拙著日本小説史上参照されし